2021年3月21日

別所線が「赤い橋の電車」と呼ばれる由来の「千曲川橋りょう」。修復工事が続いていました＝2月27日

台風被害受けた上田電鉄別所線　1年半ぶり全線開通

みんなの鉄道復活へ

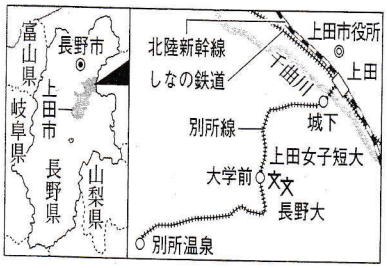
長野大生が大奮闘

保田浩希さん（21）
植田晃弘さん（21）

Youth Stadium Uスタ

「待ってました！　ありがとう」―。2019年10月の台風19号で被災した上田電鉄別所（べっしょ）線（長野県上田市）が28日、1年半ぶりに全線開通します。列車内にも注目です。沿線の長野大学の学生有志が市民らから募集した「メッセージ広告」を掲示して走ります。

前田泰孝記者



「別所線と共に生きる!!」

「大好きです。私の生活の一部です」

「上田のシンボルです！　おめでとう」

「奇跡の復旧と100年の軌跡を更に」

学生のもとには153人分のメッセージが集まりました。20日から1カ月間、メッセージが車内広告となって掲げられます。

廃線危機感じて

北陸新幹線の上田駅と別所温泉駅を結ぶ別所線（11・6キロ）。「赤い橋の電車」と呼ばれる由来の「千曲川橋りょう」が知られていました。その橋が2年前の台風で全長224メートルのうち44メートルが崩落。上田―城下（しろした）駅間が不通になり、代行バスによる運行が続きました。

全国でローカル線廃線が相次ぐなか「このままでは別所線も…」と危機感をもち、行動に立ち上がったのは、長野大学鉄道研究同好会の植田晃弘さん（21）です。

「長野大生の4割が車で通学、2割は公共交通機関を使っています。上田女子短大の学生たちも別所線を利用しています。1年生は車を持てない人が多いんです」

有志を募り、企画したのは「別所線かけはしプロジェクト」。上田電鉄に寄付する募金活動を考えました。

この考えに共鳴し、「メッセージを募集し、それを基にした広告をつくればおもしろい」と提案してきたのは、長野大学3年生の保田浩希さん（21）でした。デザインを専攻し、デザインサークルでも活動。「台風で橋が落ちた時、橋向こうの家に帰れず大学に一時取り残された。自分の車もなく、別所線は貴重な通学の足」と、復旧への強い思いがありました。

1回目のプロジェクトで列車に掲げられたメッセージ広告（別所線かけはしプロジェクト提供）

メッセージ広告募集プロジェクトで寄付募る

松任谷由実さんも

今回のメッセージ広告募集は2回目。1回目は被災直後の19年10月に78人分のメッセージ（1口1100円）を集めました。駅頭で呼びかけるのが主で、別所温泉駅に偶然いた歌手の松任谷由実さんも「別所線応援してます!!」とメッセージを寄せてくれました。

1回目に集めた広告は、同年12月から城下―別所温泉間を走る列車に掲示しました。別所温泉の観光協会や旅館組合も協賛し、約24万円を上田電鉄に寄付しました。

2回目の募集は今年2月。153人が応募してくれました。

今回は八十二銀行が共催となり、13企業が協賛。2月に上田駅や別所温泉駅、共催した銀行の6店舗でメッセージを募集しました。掲載料と企業の支援金を合わせた約24万円を上田電鉄に寄付しました。

学生たちは、メッセージを集める中で、別所線が通勤・通学・買い物になくてはならない地域の足であることを改めて実感しました。さらに、賛同してくれた人の半数以上が普段は別所線を使っていないけれど、気にかけている人たちだということも分かりました。

「心の故郷は上田です」と市外、県外の人も多く協力してくれました。

保田さんは「失って初めて別所線の価値に気づく人も多かったと感じる。この価値を高める活動が続けられればと思う」と語ります。

全線開通を前に、植田さんはいいます。「別所線はこの地域の一部。全線開通に、広告を通じて祝意と感謝をみんなで共有したい」